

平和を願って



北海道新聞文学賞受賞作など、これまでの作品が収録されている詩集



世界詩人会議「名誉文学博士」の称号の証書と記念の写真



一冊の詩集

この6月に89歳を迎えた詩人の大貫さん。60年以上創作を続け、昨年は集大成の「大貫喜也全詩集」を刊行した。歩んできた人生と詩について静かに語ってくれた。

波乱の人生

山形県で生まれ、早くに両親を亡くした。満州開拓を目的に15、18歳くらいの青少年で組織された満蒙開拓青少年義勇隊に志願し中国へ。現役兵となった昭和20年に、旧ソ連軍の捕虜となりシベリアに抑留された。厳しい寒さと強制労働で多くの捕虜が命を落とす中、懸命に生き延び、2年後に帰国。その後、東京で警察官として働きながら高卒の資格を取得し、25歳で大学に入学。卒業後は北海道で教師となり定年まで勤めた。穏やかな佇まいからは、そんな波乱の人生を送ってきたとは、感

詩で戦争体験を伝える

大貫 喜也 さん

おおぬき・よしや
青葉町在住。
詩人。昭和29年に初めての詩集「黒竜江附近」を刊行。平成14年に「黄砂蘇生」で北海道新聞文学賞を受賞。戦争体験を詩で表現し、現在に伝えている。平成25年に北海道文化団体協議会芸術賞を受賞。北海道詩人協会理事や北広島市文芸協会顧問などを務め、文化の向上に貢献してきた。

じられない。

今年には戦後70年。終戦の日が近づき、改めて思いを聞いた。

「戦争は避けるべきです。争いがあっても話し合いで解決できるといういですね」。しみじみと語った。

詩とともに60年

子どもの頃から本が好きで短歌も詠んでいた。そんな大貫さんの運命を変える出会いがあったのは大学在学中。電車の中で詩集を読んでいたところ、隣りに座っていた男性に「詩が好きですか?」と話し掛けられた。詩人の上林猷夫さんだった。それから交流が始まり、上林さん宅を訪問した際に抑留体験を話すと、出版を勧められ、大学4年のとき、「黒流江附近」を刊行した。

その後、仕事の傍ら平和への願いや日常生活、自然などを詩で詠んだ。世界各地で開かれる世界詩人会議に8回出席し、海外の詩人

と交流。アメリカの大会で「名誉文学博士」の称号を贈られた。作品は中国やルーマニアなどでも出版。功績が認められ、平成15年度北広島市文化賞を受賞した。

地域の皆さんと一緒に

現在は年齢を考え、北広島市文芸協会顧問などの役職から退いた。しかし、地域のごみ拾いや花植えなどには、元気に参加している。自宅周辺の散歩も毎週欠かさない。昨年は、地元自治会の歌を作詞。設立40周年祝賀会で歌われ、親睦のために一役買った。

創作も熱心に続けている。「作品は何度も何度も校正して、見直さないと駄目なんですよ。これからはもっと書き続けます」。自分で直しを入れた原稿用紙を眺め、ほほ笑んだ。

その目に映る情景、胸に湧き上がる思いを、鋭く、また優しく表現していくことだろう。

